私は、山形教区第二組皆龍寺の榊　法盡ともうします。よろしくお願い致します。大谷派教師資格を取得してからまだ３年ほどで、こうやって聞法なさっているみなさまの前で話をするのは大変おこがましいとおもいますが、ぜひ暖かく見守っていただきたいなと思います。

定例は初めてでして、非常に緊張しております。いままで法話したなかで、長くても３０分くらいで、どのくらい話すれば９０分なのかよくわからくてですね、もしかしたら時間が余っちゃうかもしれないと思うと、不安になりまして、緊張しております。もしかしたら早く終わっちゃうかもしれませんが、ご了承ください。

私の経歴を少しだけお話させていただきますと、山形中央高校卒業後、山形大学の工学部へ進学いたしました。次男なもんですから、お寺を継ぐということを考えておらず、やりたい仕事で食べていきたいなと考えておりました。大学３年の時に、長男である兄が亡くなりまして、ぼんやりと、「お寺をつがないと」と思うようになりました。そのころは、夢もあって大学院進学を考えていました。大学４年になり、研究も楽しくさせていただき、大学院試験も通り、ぼんやり将来を考えていたのですが、住職も 60 代で将来、就職したところで、何年働けるのか、突然お寺に戻ることに対してとても不安になり、とりあえず大学院を１年休学しまして、大谷派教師を取得することにしました。毎年夏と冬に２回本山で大谷派教師資格取得試験がありまして、それを受けることにしました。試験は筆記で５科目あるんですが、仏教学、真宗学、教化学、声明作法、宗教法規です。最初の夏が２科目おとしまして、それがメインの仏教学、真宗学だったんですね。これはやばいとおもいまして、研究室の先生にはご迷惑おかけしましたが、大学院を退学しまして、再び勉強に力を入れて冬に再度受けてようやく合格することができました。

よく皆さんから「大学院まで行ったのにもったいない」と言っていただくんですが、ただ、大学院をやめたことに未練はなくて、自分の中で結果的に良かったと思ってます。専門は情報科学なんです

が、昔から人工知能や人工生命に興味があって、今でもお寺に居ながらにして勉強や研究ができているので満足しています。

　人工知能に興味をもったきっかけがありまして、映画なんですけれども。タイトルが「アンドリューNDR114」という映画です。日本では２０００年頃に公開されたと思うんですが。原作がアイザック・アシモフさんの「バイセンテニアル・マン」という SF 小説です。意味は２００年の人という意味です。人間とロボットの境界線をテーマにした話ですね。このアイザック・アシモフさんは生化学つまりは、生物の化学的構造の専門で、1950 年ころから科学の解説者として活躍されて、小説もかかれるようになりました。ロボットとか宇宙の近未来の作品が有名で、「われはロボット」という作品が一番有名ですね。この作品に「ロボット工学三原則」というロボットが従うべき原則が描かれていて、現代の小説や、実際のロボット工学にも影響を与えて居ます。その内容が
「第１条　ロボットは人間に危害を加えてはいけない」
「第２条　ロボットは人間の命令に従わなければならない」
「第３条　ロボットは１条２条に反しないかぎり自己の身を守らなければならない」という３か条です。面白いのが、この３原則はロボットと人間の関係で書かれているのですが、皆さんの身の回りの家電製品にも通用するところですね。１条の人間に危害を加えないというのは、安全ということです。２条の命令に従うというのは便利ということ、そして３条のロボット自信の身を護るというのは長持ちするということです。みなさんが家電製品にもとめていることそのものですよね。安全で便利で長持ちする、家電製品には大事なことですよね。
　話はもどりますが、この「アンドリューNDR114」のお話ですが、マーティン家の人間とアンドリューという家庭用ロボットのお話です。マーティン家はリチャードと奥さんのレイチェルと長女のグレース、次女のアマンダの家族で、ある時リチャードが「NDR114」という家事ロボットを買ってきてアンドリューと命名するところから物語がはじまります。長女のグレースは、アンドリューに対して

反感をもっていてですね、アンドリューに２階の窓から飛び降りるように命令して壊そうとします。お父さんのリチャードは、子どもの倫理観を心配したんでしょうね、家族にアンドリューを人間として扱うように約束させます。アンドリューは人間というものに興味をもって行くわけですね。

月日は流れて、リチャードは老いて、娘たちも大人になります。アンドリューと次女のアマンダは密かに恋をしていくんですが、言い出せるはずもなく、アマンダは人間と結婚します。アンドリューは人間を学んでいくうちに自由に憧れて、リチャードに「自由がほしい」といいだすわけです。リチャードは、色んな思いがあったのでしょう。「出ていきたければ出て行け。お前は自由だ」というわけです。そしてアンドリューは数十年の旅をします。

旅先でとある研究者と出遇います。この研究者はロボットを人間の外見にする研究をしていて、アンドリューは人間そっくりにしてもらいます。そしてマーティン家に帰ります。

マーティン家に帰ると年老いた次女のアマンダがいて、さらにその孫娘ポーシャが出迎えてくれます。やっかいなことにそのポーシャがアマンダそっくりなんですね。それでアンドリューは今度はポーシャに恋してしまうわけです。こんどは見た目も人間ですし、アンドリューとポーシャはお互い愛し合うわけですが、人間とロボットですので、もちろん結婚は認められません。月日はながれて、ポーシャもどんどん老いていきます。アンドリューはまた旅先で出会った研究者に会いにいきます。今度は、中身を人工臓器に変えてもらいます。そして、人間として認めてもらうための裁判を起こすわけです。「事故でほとんどの臓器を人工臓器に変えている人間もいる。何故私は人間ではないのか」と法廷に問うわけです。ですが、結果も虚しく法定は訴えを否定しました。年老いたポーシャは延命措置をしてなんとか生きているというくらいまでの歳になり、長い人生につかれ、死を決意します。そしてアンドリューは今度は、研究者のもとへ行って、人工血液に老化と死に至るという機能を付け加えてもらいます。

そして再び年老いた姿で法定に立つわけです。裁判官から質問を

うけます。「あなたはどこが人間なのか」と。するとアンドリューはただ一言答えます。胸を指し「ここです」と。そして判決が下る日。アンドリューとポーシャはベッドに横になりながら判決を待ちます。判決「アンドリューは史上はじめて 200 年生きた人間であることを認める」そう聞いた時、アンドリューはポーシャと共に息を引き取ります。最後は人間として死んでいったわけです。

こんなお話です。何をもって人間というのか、非常に考えさせられます。アンドリューは最初、人間の姿を手に入れ、人間と同じ構造を手に入れ、そして老化、死をとりいれて初めて人間と認められた。そして、アンドリューの法廷での一言ですね。胸を指して「人間である理由はここです」と。最初は単純に心のことかなあ、と思っていたんですけれども、最近は「人間として死んでいくという決意」かなあとか、「自分は人間であるという思い」かなあとかいまさらながら深読みしているわけです。
とにかく、この映画をみて、アンドリューというロボットに人間というものを感じて人工知能に興味をもったわけです。

それで、いまでは、人工知能から広がって、脳科学、心理学、それこそ生物学なんかもして、勉強で新しい事を知ることが楽しくなっちゃって、数学や物理学なんかも趣味で勉強してるんですが、「仏教は勉強してないの？」と聞かれると正直な話、なかなか手が出ないですね。
それこそ、中観思想とか唯識なんかの哲学的な話は面白くて勉強したくなるんですが、真宗と言われるとなかなかです。初めて真宗を学ぼうとした時も、何が何やらでちんぷんかんぷんです。物理学や数学の方がまだ納得できます。

自分の中で、真宗の例えばかりなところがなかなか抵抗感があるわけです。なんといいますか、ごまかされている感じがあるんです。例えば、「念仏一つで救われる」と言われれば、そのままの意味でとらえれば「南無阿弥陀仏と一言言えば楽になる」となると思うわけ

ですが、そんな訳あるかいと思うわけです。それこそカルト宗教のように「信じていないから救われない。信心が足りない」なんて言われればそれまでなんでしょうが、そういうわけではない。念仏についても、自力の念仏でなく他力の念仏という条件があるわけです。じゃあ他力って何だというと阿彌陀佛の本願力というわけです。こういった構造がなにかしらあるわけですが、例えを例えで説明されていてわけがわからんのです。根拠がはっきりしないと気がすまないというか、なっとくができないんです。私にとってそういった根拠がはっきりしなければ俗にいうオカルトと一緒に感じてしまうんです。それこそ幽霊だとか超能力とかと同じく信じることのできないものです。

　ですが、オカルト的な存在を否定はしませんと一応言っておきます。よく世間では、幽霊とか超能力とかを非科学的だからありえないと否定する人がおりますが、あれはおかしいと思います。そもそも科学とは何かといえば、再現性です。誰もが同じ条件で同じことをすれば同じ結果が得られるものを真理としてみとめられるのが科学です。ですのでオカルトのようなものは再現性が無いので非科学ですが、ただ単に科学では証明不可能なわけがわからないものでしか無いわけです。いわゆる信じる指標が科学です。先程は超能力などと言いましたが、最近ではそれも科学に昇格しようとマジメに研究されてる方がいらっしゃいます。人間の意識が回りの環境に影響するという話ですが、超心理学という学問として研究されています。興味あるかたは地球意識プロジェクトで調べてもらうと信じるかどうかを別としても夢があって面白いですよ。

　話がそれましたが、とにかく根拠がわからないと信じられないものですから、「念仏」の根拠を整理して行こうかと思います。

ここからは、私自身の今までの学んだことや思考を追いながら話していきますのですこしごちゃごちゃしているかもしれませんがどうぞご容赦ください。

まずは、「念仏とはなんぞや」ということですね。念仏は「なんまんだぶ」と口に出して言う事だと小さい頃から勝手に思ってましたが、漢字を見れば「仏を念ずる」なので「あれ？仏を念じたことなんて無いぞ。どういうこっちゃ」と思いました。そこで、調べてみることにしたわけです。

念仏の最初はどうだったのか、気になりまして、阿含経から念仏を探してみました。
長阿含の第５ですね。ここでは一心に佛を念じて悪道に堕ちるのを免れた優婆塞の話がでてきます。
また、雑阿含の第三十三には念仏念法念僧の三念を修得しているから命終の時に悪趣に生まれることはありません、と。
そして増一阿含経第十四には、もし恐れがあるならまさに我が身、仏陀のことですね、我が身を念ずべし、とあります。

そして、パーリ経典に「比丘衆よ、一法あり、修し多所作なれば、能く一向厭背（えんぱい）、離貪、滅、寂静、通、覺、涅槃を起こす。一法とは何か。念仏なり」とあります。

阿含経でも念仏をすすめられていることはわかるんですが、この念仏は特に稱名念仏ではなくて、観念念仏であるわけです。

一方で、称名は阿含経では出てこないのかといいますと、一応でてまいります。「彼の名号を称すべし」とか「如来の名號を稱喚す」などとあるわけです。阿含経典における稱名念仏は、仏陀への賛嘆とか帰依の意味だそうで、浄土教の稱名念仏のような深い意味はないらしく、すこし異なるみたいですね。アブラハム宗教のアーメンのような感じでしょうかね。イスラム教のアッラーフ・アクバルが近いでしょうか。そんな感じだったようです。

真宗のような稱名念仏はやはり、大乗が発展して特殊に構築され

たものであるように思います。

　大乗が興ってきますと、念仏の佛という意味が変わってきますね。初期仏教で仏といえば、仏陀のことですが、大乗が発展して様々な表現としての仏がたくさん現れてくるわけです。固有名詞の仏が、一般名詞になるわけですね。

さて、弥陀の本願において、念仏がどのように描かれているのかですよね。大経をみてみますと、１７願ですね
「たとい我、仏を得んに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、我が名を称せずんば、正覚を取らじ。」と賛嘆として書かれています。

そして、１８願の「十方衆生、至心信楽して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん。」ですね。

　この十念の念も調べてみると面白くてですね。大無量寿経のサンスクリットでみてみますと、この念は citta(ちった)と書かれているんですね。念には、Manasikara や Smrti(スムリティ)などの別の単語があってそれらが「念」として訳されています。Citta は心の意味があって、想念、Smrti は憶念、Manasikara は作意の意味だそうです。この康僧鎧訳の大無量寿経に出てくる「念」には３つの使い分けれれた単語があって、ニュアンスが微妙に異なるみたいですね。

下巻においては、三輩往生が説かれていますが、どれも菩提心を起こして一念しなさいとあります。

とにかく、大経には、素直に受け取れば、菩提心が中心で、念仏は賛嘆、信楽ですかね。浄土に生まれんと欲して、阿弥陀佛に頼むと

いうのが基本みたいです。

七高僧を龍樹から順番にみていこうかと思います。
龍樹の論書のなかに、十住毘婆沙論があります。これは、華厳経の十地経の解説ですね。このなかでも、浄土教でよく注目されるのが、易行品です。
有名な易行道の話ですね。

「仏道に無量の門あり。世間の道に難あり易あり。陸道の歩行はすなはち苦しく、水道の乗船はすなわち楽しきがごとし。菩薩の道もまたかくのごとし。あるいは勤行精進のものあり、あるいは信方便易行をもってとく阿惟越致に至るものあり」

つまりは、仏道にはいろんな方法があって、一生懸命修行をする難行道と修行ではない易行道があるということですね。その易行道が信心を方便とする稱名念仏なわけですね。

ですから
「もし人疾（と）く不退転地に至らんと欲せば、恭敬心をもつて、執持して名号を称すべしと。若し菩薩此の身において阿惟越致地に至ることを得て阿耨多羅三藐三菩提を成らんと欲せば、當に是の十方諸佛を念じ、其の名號を稱すべし」という話になるわけです。

天親の浄土論、曇鸞の論註についてみてみますと、大事な所が五念門だと思いますが、
順番に見ていきますと。
「かの国に生ずるこころをなす」が故に「身業をもって阿弥陀如来・応・正遍知を礼拝」する。

「如実に相応を修行せんと欲す」が故に「口業をもって賛嘆」する。
「如実にシャマタ（止・止息・寂静）を修行せんと欲す」が故に「心常に一心に専念して畢竟じて安楽国土に往生せんと作願」する。
「如実に毘婆舎那(観・妙観・正見)を修行せんと欲す」が故に「智慧観察し、正念に彼を観ずる」
「大悲心を成就せんがための故に」「一切苦悩の衆生を捨てず、心常に作願回向す」
この５つですね。なんでこの五念門が大事か。「五念門を修して行成就しぬれば、畢竟じて安楽国土に生まれて、かの阿弥陀仏を見たてまつることを得。」(P138)ですね。

そして稱名念仏については賛嘆門の「口業をもって賛嘆」「かの如来の名を称し、かの如来の光明智相(智慧のすがたとしての光明)のごとく、かの名義のごとく、」です。

それに対して曇鸞は、
「しらるに名を稱し憶念すること有れども、无明なほ存して所願を滿てざる者、何となれば、如實修行せざると、名義と相應せざるに由るが故なり。」

「又三種の不相應有り。一には信心淳からず、存るが若し亡るが若きの故に。二には信心一ならず、決定无きが故に。三には信心相續せず、餘念間つるが故なり。」
つまりは「一つには信心があつくない。ときにはあり、ときにはなくなるからである。二つには信心が一つでない。信が決定しないからである。三つには信心が相続しない。*自力の心がまじわるからである。」と、信心に重点をおいている稱名念仏ですね。これがいわゆる三不信ですね。不淳、不一、不相続。

道綽の安楽集をみてみますと、末法の時に
「まさしくこれ懺悔し福を修し、佛の名號を稱すべき時の者なり。もし一念阿彌陀佛を稱するに、即ち能く八十億劫の生死の罪を除卻

せん。」と時機相応の念仏です。

また曇鸞の三不信を引用して
「此の三心を具して若し生れずといはば是のことわり有ること無けん。」と。

善導は観経の要を稱名念仏であると位置づけしました。そして、観経に凡夫往生を見出すわけですね。そして信心確立のために五つの行があると明らかにされました。観経疏に
「一心に專ら此の『觀經』・『彌陀經』・『無量壽經』等を讀誦する、一心に彼の國の二報莊嚴を專注し思想し觀察し憶念する、若し禮せば即ち一心に專ら彼佛を禮する、若し口に稱せば即ち一心に專ら彼の佛を稱せよ、若し讚歎供養せば即ち一心に專ら讚歎供養する、」
これを五正行といいます。
そして「復二種有り。一には一心に彌陀の名號を專念して、行住坐臥、時節の久近を問はず、念念に捨てざる者は、是を正定の業と名く。彼の佛願に順ずるが故に。」と稱名念仏を正定業としました。

もう一つ善導で大事なのが、願行具足ですね。
「南無と言ふは即ち是歸命なり、亦是發願廻向の義なり。阿彌陀佛と言ふは、即ち是其の行なり。この義を以て故に必ず往生を得と。」
つまり南無は、帰依の意味つまりは信心であり、浄土往生を願う願をおこし回向すること。そして阿弥陀佛は、行であるわけです。大経の十八願そのままだと思うんです。帰命というのは至心信楽、発願回向が欲生我国、行が十念。称名念仏は本願に順じているということですね。

この善導まででほぼ真宗の念仏の原型が確立しているようにおもいます。

浄土に生まれんと欲して、信心を起こし、凡夫の自覚と願行具足の

念仏。
だいたいは念仏の解釈の流れがわかってきたように思います。

これをふまえて、親鸞聖人の念仏というものを見ていこうかなとおもいます。

まずは、親鸞の念仏の大きな特徴は、大行ととらえているところですね。
行巻に
「大行とはすなわち無碍光如来の名を称するなり」とあります。
そして
「しかれば名を称するに、よく衆生の一切の無明を破し、よく衆生の一切の志願を満てたまふ。称名はすなはちこれ最勝真妙の正業なり。正業はすなはちこれ念仏なり。念仏はすなはちこれ南無阿弥陀仏なり。南無阿弥陀仏はすなはちこれ正念なりと、知るべしと。」

正業と正念は八正道の一つですね。つまりは、称名は実践的な行であるということです。

また「この行信に帰命すれば摂取して捨てたまはず。ゆえに阿弥陀仏と名づけたてまつると。これを他力といふ。」(P190)

阿弥陀佛は他力だというわけですね。つまりは称名念仏は他力を頼む大行であるということです。

そして、「念仏成仏」であり、成仏とは佛になること、つまりは真理を悟るということですね。

仏教の悟りとは何だったのかといえば、縁起ですよね。物事は独立して存在するのでは無く、互いの因縁の相互作用で存在しているということが悟りであり、それは、結局のところ存在そのものが他力によって存在し得るということだと思うんです。

ですから、親鸞の念仏っていうのは、

称名念仏は他力によって他力を知らしむる大行である。

ということなのだと思います。

一方でですね、自力に関して末灯鈔で
「まづ自力と申すことは、行者のおのおのの縁にしたがひて余の仏号を称念し、余の善根を修行してわが身をたのみ、わがはからひのこころをもつて身・口・意のみだれごころをつくろひ、めでたうしなして浄土へ往生せんとおもふを自力と申すなり。」と
「善根を修行してわが身をたのみ」というところがポイントですね。

他力の念仏が即得往生であるのは、他力をもってして他力を悟るから成り立つのであって、自力に頼めば、他力を実感できないから意味がないと思うんです。たから他力は易行であって正業、自力は遠回りの難行であって雑行になるわけだと思います。

そもそも、他力の宗教の方が一般的ですよね。

アブラハム宗教でも唯一神ヤハウェの図らいによって世界が回るわけですよね。

修行を行う禅宗だって他力です。といいつつも曹洞宗しか手を付けたことがないので、曹洞宗の話ですが、

曹洞宗の道元禅師が書かれた正法眼蔵の仏性巻に
大般涅槃経の一切衆生悉有仏性について
「悉有の言は衆生なり、群有也。すなはち悉有は佛性なり。悉有の一悉を衆生といふ。」つまりは、衆生全体が仏性であると。衆生一

人ひとりが仏性を持つのではなくて、衆生全体の相互作用が仏性であるというわけです。

また、生死巻、生き死にの生死ですね。それには
「ただわが身をも心をも放ちわすれて、佛の家になげいれて、佛のかたより行われて、これに従いもてゆくとき、力をもいれず、こころをも費やさずして、生死をはなれ、佛となる。」とあります。佛に身を任せる完全な他力ですよね。

世の中他力なんです。
妙好人の浅原才市という方がですね、ビシっとそのことを詠まれております。

世界に自力なし、
我心こそ自力なり、
自力が、他力に貫て、
今わあなたと申す念仏。

まさにその通りだと思います。自力なんて存在しないんです。幻想です。

今から少し恐ろしい事実をお話させていただきます。

脳科学においてですね、受動意識仮説というものがあります。
1983 年にカリフォルニア大学のベンジャミン・リベット博士が発表しました。その内容が、
「意識的な意思決定の 0.35 秒前に無意識的な信号が立ち上がることを確認した」という内容です。
つまりは、自分が意識して、たとえば、手を上げるぞ！と意識上で決定する 0.35 秒前にはすでに無意識の脳内で手を挙げるということが決定されているというものです。

また、2008年にはマックスプランク研究所のジョン・ディラン・ヘインズ博士が追実験をしていて同様の結果がでています。

つまりは、自分で決めたと思っていたことも実はすでに決まっていたことで、自分の意思ではないということです。自分の意思だと勝手に認識させられているということです。自由意志は存在しないという仮設が受動意識仮説です。

だから実は、自力も他力なんです。自由意志があると信じてしまっているわけです。だから問題なんです。
私という意識が、決定しているように思えて実は無意識で決まった決定事項を私が決定したように認識させられている。だから他力が見えてこないんです。

自由意志はないのに、人格、意識が自由意志と認識しているからふとすると自力に頼ってしまう。それをもう一度、他力だとわからさせるための念仏だと私は思うんです。

私が念仏しているのではなく、私の身が念仏しているんです。

この自力から他力への転換は、自力の否定ではなく、あくまでも他力で行動する自分の受け入れであります。
私の意識と私の身を分けてしまっていることが問題なんです。
デカルトの「我思う故に我あり」を望んでしまっている。この意識こそが私であると。

私という意識が私の身を支配しているのではなくて、他力によって動かされる私の身が私の意識を支配しているのです。本当の私は、人格ではなく、意識でもなく、人格、意識を含めたこの身である。

本当は身に支配されている私というところに私が凡夫であるという認識が生まれる。いくら善行を積もうと意識しても、身の支配によ

って善行できるとは限らない。自力で修行精進してもいきつく先は身に支配されている自分、もっと言えば、世界という縁起に支配されている自分、他力であるという真理。

つまり自力修行は遠回りでしかない。だから雑行であり、難行なのではないか。
だから他力念仏は近道で、正業であり、易行なのではないかなと思うわけであります。